

祝

2014年3月 東京大学博士号(環境学)取得

岩佐礼子 さん(56歳)

【論文テーマ】「持続可能な発展のための内発的教育(内発的ESD)」の構築へ向けて
研究で出会った人から学んで成長したことが、かけがえのない宝物に

博士論文で示した内発的発展を支える新しい教育の理論は、書籍化も決まった。今後はその理論を、出身地の大分県佐伯市で実践に移してみたいという岩佐礼子さん。チャレンジしてわかった大事なこともあった。「6年半前とは価値観ががらつと変わりました。博士号を取ることが重要じゃなかった。研究を通して出会った人から自分が学んで成長したこと、それこそがかけがえのない宝物になりました」

■持続可能な発展を支える生活世界の教育

今年日本がユネスコに提案した「ESDの10年」の最終年で、ESD (Education for Sustainable Development) が注目されている。岩佐さんは、「持続可能な発展のため、教育によって社会の仕組みを変えていく」というESDの理念を支持しつつも、ESDが個々の教育を通して解決しようとしている点には限界も感じていた。研究のもう一つの柱としたのが、鶴見和子氏の内発的発展論だ。この発展論が根ざすのは、公的教育以外の地域による伝統的教育、生活世界の教育である。内発的発展論にヒントを得ながらも、鶴見氏以降体系的な研究がされているわけではなく、まずは手探りで、宮崎県綾町、山形県西川町、千葉県原市、宮城県南三陸町など各地で聴き取りをすることから始まった。

宮崎県綾町は、移住希望者の受け入れや町おこしの成功例として話題になることが多い。しかしそれを支えるものとして、自治公民館活動と、さらにそれを下支える様々な伝統的講集団の活動があった。こうした共同的な生活世界の学びの総合的な事

例として上畑地区を中心に研究した。

出羽三山信仰ゆかりの地でもある山形県西川町大井沢地区では、1951年から2007年まで続いた小学校の自然学級を研究した。狩猟やきのこ探りなど地元の自然の達人が豊富にいた。教師も新任だと児童から教わる場面もあり必死だ。自分もかつて学んだ保護者の理解と協力も大きい。地元の達人と教師と親、3者が真剣に取り組んだからこそ56年も続いた事例で、NPOまかせでそうはいかない。

出羽三山信仰つながりで、千葉県原市も調査した。千葉県には現在も100くらいの講集団があり、熱心な三山参りもその中の講の一つだった。講同士は交流することはないが何に入るかは自由だし、一人が複数参加することもある。講のメンバーは毎月集まり、必ず飲み会もセットだ。講によっては地域

の危機管理や祭りの運営などにも強く関わる。

宮城県南三陸町は3・11で津波被害の大きかった町の一つ。被災した人たちが復興にあたってまず望んだのは、学校と神社の復活だった。ここでは伝統的な契約講が持つ地域力に加え、ボランティアとして来た自然の達人や、地域の人々が力を合わせて「ヤマ学校」を復活し、変動に対応するたくましい子供を育てることに大きく寄与している。

■地域の内の知恵と、外からの助け

これらの実例から見えてきたのは、自然と深く関わる地域の伝統的学び十外からの力や情報の助けによる内発的ESDの姿だった。過疎や高齢化で集落が衰退しようとする際に、その一員として選べる手段は2つしかない。見捨てて移住するか、残ってなんとかするかだ。自分たちでなんとかしなくてはと考えるのが内発性であり、結束力にもなる。人のしがらみや伝統・文化・信仰といったしほりも、独自性が見れば活かせるものもあるはず。地域の資源と自分たちの集団の力を見つめ直し、さらに外の力も借りて、持続可能な発展を探る。自然とどのように続いてきた地域社会が日本各地にある。世界にもあるだろう。温故知新ということかもしれない。

岩佐さんは比較的研究に専念できる立場にあったというが、それでも修士課程2年半、博士課程4年かかったの取得となった。「論文作成は孤独な作業。特に社会人は期限がなく先延ばししがちです。自分が情熱を持ち続けられる研究を見つけてチャレンジしてください」と、後に続く人にエールを送る。



岩佐さんの博士論文は、東京大学大学院新領域創成科学研究科において研究科長賞も受賞した。